

なにがアグロフォレストリーへの移行を支えたか

ータンザニア南部・焼畑農耕民の社会生態史ー

近藤 史 氏 (神戸大学大学院農学研究科地域連携センター)

本研究の対象であるタンザニア南部高地に住む農耕民ベナは、古くは二次林で焼畑をおこない、植生が劣化してからは草地休閒型の焼畑をおこなってシコクビエを栽培してきたが、タンザニア独立後は政府が推奨する化学肥料を用いたトウモロコシの常畑耕作を受け入れた。しかし近年、連作による土地の疲弊や、人口圧の高まりによる農地の狭小化と薪不足、肥料価格の高騰が深刻化したため、タンニン抽出用に導入された早生樹モリシマアカシア (*Acacia mearnsii*) を植えて、その林で焼畑をおこなうようになった。

新しい焼畑では、休閒期間中に地力維持を樹木の再生力に委ねる一方で、薪の採取を通して日常的に樹形や樹木密度を管理して経済価値の高い林を育成する。そして、薪炭を生産した伐採跡地で焼畑をおこなう。これは、農林業の複合を通して継続的な土地利用を可能にする、アグロフォレストリーへの移行であった。

本発表では、タンザニアの政策変化や市場の動向に照らしながらベナの社会生態史を分析し、このような農業改革を支えた要因について考える。